
2-Dの三人組

道造

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

2 - Dの三人組

【Nコード】

N4191BA

【作者名】

道造

【あらすじ】

スクールランブルのギャグ。時系列は体育祭終了後

播磨にとっては、正直ロクな事がなかった体育祭も終わり。
疲れた身体とひきずって帰宅し、何か物凄い笑顔の絃子にハゲ頭を
パカパカ叩かれている夜に。

「フツ……夜分遅く失礼する」

「マンション生活とは驚いたな。てつきり昔のマンガのように長屋
で生活してるかと」

「イチジョー」

播磨は、玄関先のドアを開いた後、目の前の三人組を見て。

「帰ってください」

何かに疲れた表情で、ドアを閉めた。

がし、と無骨で硬そうな靴が、ドアに挟まる。

安全靴、という奴だろうか。

象が踏んでも壊れまい。いや、さすがに象が踏んだら壊れるかもし
れないが、この際関係ない。

問題は、ドアを閉じることが出来ないということだ。

「酷いじゃないか。ライバルを前にして」

「戦いは終わり、すでに認め合える仲となったがな」

「イチジョー」

……ハリー・マッケンジーの足から顔まで視線を上には伸ばした後。播磨は大きいため息をつき、人生にまた不幸が訪れたことを、静かに諦めた。

「いつたい、何の用なんだよ」

「つか、何でお前らオレん家知ってんだよ。

目線で訴えながら、三人を睨む。

「2-Dの情報網にかかれば、個人情報を探るくらい簡単なモノさ。周防美琴のバストサイズもわかる」

「それ犯罪じゃねえのか？」

少し聞きたい気もしたが、天満ちゃんに知られたら自殺モノの発言になるので、やめた。

ハリーは播磨の顔から一つ視線をずらし、ドア横にかかっている表札を見る。

「刑部……どこかで聞いたことのあるファミリーネームだな」

「居候してるのか。俺の希望としてはやはり長屋で。こつ、ちゃぶ台があつてだな」

「イチジョー」

バレると、拙い。

下手に追いつ返すのは諦めて、話し合うことにする。

「あー、そういうのはいいから。何の用なんだ」

「我が2-Dはあの体育祭で敗れてしまったからな」

ハリーは腕組みをしながら、小さくため息を吐いた。
トニーがその様子を少し残念そうに見た後、会話をつなげる。

「罰ゲームとして、俺たちが体育祭で活躍した人間の願いを叶えてやろうということだ」

「イチジョー」

イチジョーしか喋れねえのか、その女。

つつか、さつきから俺の頭ばっか見てんじゃねえ。

ハゲか。

ハゲがそんなに悪いのか。

そんな自虐思考に軽く入りながらも、とりあえず帰ってもらおうと思う。

「……別に、罰ゲームなんて決めちゃいねえだろ。いいから帰れ」

「それではワタシの気がすまない」

ずっ、と。

一歩前に出て、ハリーがグラスンを外しながら答える。

……人のことは言えねえが、夜中にグラスンかけてんじゃねえよ。

「何でも、と言うわけにはいかないが。何か願いはあるかね？」

「……」

頭に、一人の女の子の顔が浮かぶ。

無い、ということもないが。

人に頼んで叶えてもらうという類の、願いではなかった。

「ねえな。あるとすれば、さっさと帰ってもらおうことか」

「そうか、では何か賞品をあげることでしょう」
「いや、帰れよ」

ブルーアイズを光らせ、播磨の訴えを華麗にスルーした後。
ハリーは小脇に抱えていたビニール袋を漁り、中からお菓子を
取り出した。

「チョコレートとチューインガム、どっちがいい」

「お前、俺のこと馬鹿にしてるだろ」

「いや、冗談だ。本命はこっちだから」

これは単純に差し入れた、とハリーは呟き、手渡す。

文句を言った癖に、明日を生きるための食料カローが欲しかった播磨はそれを受け取る。

ハリーはそれを満足げに見た後、トローにも目配せし、彼が持つ紙袋をゴソゴソと漁って。

「赤ズゴック」

某専用ガンプラを取り出した。

「菓子の方がマシだったよ」

でも一応受け取る。

トローも、ハリーに続くようにして紙袋を漁り。

「もはや語るまい」

ノイエ・ジールを手渡した。

「じゃあ黙れよ」

脱力しながら、一応それも受け取る。

……なんかこういう、わけのわからんの好きそうな、高野辺りに押し付けよう。

次の日、意外と喜ばれる事をまだ知らず、播磨はそう思った。

あらゆる行動で本命以外の好感度を稼ぐ男、播磨。

きつと、明日も晴れない。

「イチ、ジョー」

「いるわけねえだろ」

カレンは未だに播磨のハゲ頭に注目し、その視線をゆっくりと。

「ケンジ君、一体誰かね」

ゆっくりと。

播磨拳児の後ろにいる人物　タンクトップに半ズボンという
やや刺激的な姿をしている女性に目を向けた。

ふたり。

東郷とハリーは顔を見合わせ、頷きあって、播磨に背を向けて呟いた。

「失礼した」

「待てコラ、勘違いしたまま行くんじゃないやねえ！」

二人の襟首をひつつかみ、慌てて引き止める。

コイツらは大きな勘違いをしている。確実に。

「イチ、ジョー！！」

「いや、いないから絶対に」

絃子は全く慌てた様子もなく。

むしろ面白そうに状況を眺めながら、玄関から部屋を覗き込むララに声を返した。

……バレてもいいのかよ、オイ。

「……何が勘違いだというのかね？」

「どうみても同棲生活だが？」

二人は足を止め、聞く耳持たない、という表情で俺を見る。

「……」

この際、仕方ねえ。

はっきり言わねえと、よけいに拙い事になる。

俺の場合、言ったところで駄目になる気はするが、恐れていては何もできない。

「元々、隠すような事でもねえんだ。はっきり言ってやる」

息を吸い、状況をただの一言で表すべく、大声で宣言する。

「絃子は……俺の従姉妹だよ！！」

その声は播磨の思った以上にマンションに響き渡る。
そして、それ以上に二人の心に響いた。

「俺の……」

「絃子……」

播磨拳児は宣言した。

刑部絃子は、俺の絃子だ、と。

何にはばかることもなく、誰に恥じ入ることもなく。

教師と生徒の関係など、愛には何の障害にもならない、と。
まさに自分の全身全霊をこめて、そう宣言したのだ。

真似できるだろうか。

二人は自分と照らし合わせ、次に微笑む。
やるだろう。

もし、自分が惚れた女を見つけ、それを守るためなら。
きっと、同じ事をするだろう。

いや、それはさておいて。

男として、少しエロティックな女性教師と付き合えるなら人生破滅
しても本懐ではないか。

そんな駄目な思想が、この二人にはあった。

二人の心は理想郷に行き着き、風が甘い芳香を運んでくるのを感じ
た。

金木犀の花の香りであった。

「……ふん。やはり貴様はサムライか」

「この状況で、そこまでの大言を吐くとは。この東郷、感心した」

何にせよ、ハリーと東郷は状況に納得したようだった。

「イチ、ジョー」

ララだけは何を考えているか、未だにわからなかった。とりあえず播磨のハゲ頭に注目していた。

「そうか、わかってくれたか……」

「……いや、悪化しただけというか、気づけよ拳児君」

播磨拳児は理解してもらったことに満足感を覚え。

刑部絃子は「どーでもいいから拳児君のハゲ頭叩きたいなあ」とばかりにやる気なさげにツッコんだ。

「ここは帰るとしよう」

「この口、たとえ焼かれようとも、この事は漏らさぬので安心しろ」「ああ、帰ってくればなんでもいい。いいから帰ってください」

播磨は、ともかく一息ついた。

あとは適当に絃子に虐められて、布団の中で嗚咽しながら眠るだけだ。

本日も普段どおりの日常が守られたことに安心し、視線を横に走らせて。

少し、余計なことを言った。

「それから、お前はいい加減何か別な言葉喋れ」

播磨のハゲ頭を叩くべく、絃子はその手をウズウズさせている横で。

目をパチクリ、と少々可愛く開き閉じしながら。
ララ「ゴンザレスは眩いた。」

「ハゲ」

「わかった、もう帰れ」

ララは播磨のハゲ頭をしつこく見つめていた。
考える。

ララは、体育祭の後、ずっと思っていた。
何故コイツはハゲているのだろうか、と。

だから、ハリーと東郷に聞いたのだ。

「何故アイツはハゲているのだ」

体育祭後のキャンプファイアー。
ダンスの輪から離れ、隅っこで体育すわりしているハリマケンジを
見ながら。

ララはハリーに尋ねた。

「うむ、それはサムライだからだ」

「サムライ？」

サムライ。

死と常に向き合い、覚悟し、生きるもの。

「そう、サムライだ」

ワタシとハリーの後ろで歩み寄ってきた東郷が、厳かに眩いた。

「アイツは普段カツラを被ること己の闘争心と誇りを抑え」

東郷の台詞に連ねるようにして、ハリーも続ける。

「そしてカツラを脱ぐことで、その闘争心を解放し、実力を発揮することができるようになる」

ヤツがあのカツラを脱いだときは、驚愕したものだ。

ハリーはそう呟き、自身が初めて播磨と出会い、闘った時の事を話す。

「サムライ」

「「うむ」」

ララが認める二人の男。

その二人が認め、そして最後のスパートでハリーを追い抜き、勝った男。

「サムライ、イコール、ハゲ」

「「それは少し違うが、そうだ」」

ララの中で、ハリマケンジの名はこの時印象付けられた。サムライとして。

つまりハゲとして。

だから、ララは呼ぶ。

「それでは失礼する」

「またな、ハリマケンジ」

「もう帰れ！ さっさと帰れ！！」

ララにとっては、ツワモノを賞賛する笑顔で。

播磨の視点からは、何か哀れなものを見下すような笑顔で。
「ララ＝ゴンザレスは眩いた。」

「ハリマケンジ、お前はハゲだ」

「ハゲっていうなコラー――――――
――っ！」

「なあ、もう頭叩いてもいいか」

刑部宅の玄関前。

播磨拳児の近所迷惑な叫び声だけが、マンションに響いていた。

了

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4191ba/>

2-Dの三人組

2012年1月11日01時57分発行